

研究助成（2010年度募集）研究実績報告書

代表研究者	神戸大学大学院保健学研究科看護学領域 助教 上杉 裕子
研究テーマ	膝関節疾患患者の公共交通機関利用時の不安や困難と対処に関する研究

< 助成研究の要旨 >

人口の高齢化した我が国には、運動器の障害を抱えて生活する高齢者が多数存在し、その増加も見込まれている。運動器の特に下肢に障害のある高齢者は公共交通機関の利用に際し、様々な不安や困難を感じていることが推察される。

我々は高齢の膝関節疾患患者の公共交通機関利用時の不安や困難と対処を明らかとするため、関西地方のA病院整形外科外来において、65歳以上の対象者にアンケート調査を行った。アンケートは下肢関節疾患を抱える高齢患者の外出状況、公共交通機関の利用状況と利用の際に抱えた困難や不安、また利用時に独自に行っている工夫・対処行動を明確に把握することができる「下肢関節疾患を抱える高齢患者の公共交通機関の利用に関する調査票」を用いた。93名（男性6名、女性87名）平均年齢77.5歳からデータを得られた。疾患は変形性膝関節症91名、リウマチ2名であり、その中で人工膝関節置換術を受けていた患者は54名であった。

調査結果から患者は「駅の階段で転倒するのではないかと」、「歩くのが遅いため他の乗客の迷惑にならないか」という不安を感じ、「段差が大きく乗りにくい」、「駅で乗客が一気に乗り降りした時にすぐに避けることができない」、「電車やバスなど降りた先に手すりがないので降りにくい」などの困難を感じていた。

公共交通機関への要望としては、「駅の待合の椅子を増やしてほしい」、「駅に洋式トイレを増やしてほしい」、「若者や元気な人は席を譲ってほしい」、「運転中の揺れが大きくバランスがとりにくい」、「駅にエスカレーターやエレベーターを増やしてほしい」、「バスで座席に座るのを待って発車してほしい」などの要望が明らかとなった。また、安全のための工夫としては、高齢者はつり革でなく手すりを持つなど心がけていた。これらの結果は今後の公共交通機関のあり方に示唆を与えるものであったと考える。

年齢による違いとして、75歳以上の後期高齢者（66名：平均年齢80.4歳）においては、74歳以下の前期高齢者（27名：平均年齢70.3歳）に比べて、「電車やバスに乗る時に段差が大きく乗りにくい」、「歩くのが遅いため駅・バス停ですぐに降りられないのではないかと不安」をより強く感じていることが明らかとなった。

高齢者は老化に伴い様々に機能が低下してくるが、下肢機能の低下は歩行に障害を来し、運動量を低下させる。その上、移動手段である交通機関の利用が困難となると、ますます移動機会が減り、運動量の低下による循環器・呼吸器機能の低下を来し、高齢者の全身の健康度が低下してくる。また移動が困難になると「人と会う」、「趣味のための集まりに参加する」、などの社会活動も低下してくる。これらにより高齢者の心の充足が満たされなくなるばかりでなく、認知機能が低下するという悪循環に陥ることが考えられる。我が国の高齢者がいかに活動性を高め、生き生きと生活できるかは、医療費増大による国民健康保険の逼迫などの財政に関する問題だけでなく、日本全体の活性化という意味においても重要であると考えられる。

今後ますます高齢化が進む我が国において、公共交通機関には高齢者にやさしい施設やシステム作りが望まれる。本研究結果はそのための示唆となると考える。